景清外傳 二編 三

へ 13
2891
8

景清外傳松の操後編巻之三

東都 絳山戯編

第十四回

旅宿に舅壻形を相変ぞ
公庭に主客偽て首告す

前に説話せる。北条時政上洛のそのかみ。鎌倉殿の下知によりて。諸国に守護を置き。庄園に地頭を成べきよしにて吉田藤中納言経房と共に奏しけるに。君も無す奈何と思召けれども。返報に程隔ありしかば。時政天下静謐のためなる旨を只顧に奏しやけるなど。遂に其請旨に任しめられ。斯ける后は鎌倉より諸国に守護人地頭を置。国々を治めしめたまひける。さるに尾張国の内海は昔より長田党の領するが。庄司忠致景致の父子なる永暦元年の正月。主君義朝を弑し。平家に降参しつるに其

勧賞の儀を不喜終にこれを受ざりしかバ平家其驕慢を悪ミて誅
せんとせしが結構ありし風に伝へ聞て驚き恐れ故郷内海に逃下り
世を忍びて居たりしに今源氏一統の世となり君がべき所なくて終に一
家滅亡せり。尚長田が黨を捜索して根を断べしと箕尾谷に命をあたへく
内海の地頭となりしかバ長田が黨を穿鑿ある茲に伊場の十三丈阿古屋
母子が安否を知んと又十奈を伴ひ浅倉へ赴んとありしが故郷に世
を憚るべ十三ハ薦僧となり又十奈ハ霊場巡礼さる道者の貌に打扮て
浅倉さして下りしが往く尾張の国なる野間の内海に経る此地へ十三も
来てなるべし然しき人も多かれバ是をおしみも世をせばく志を方に立寄に
其人へさちなる家だにもなし。此奈何と不審て逍遥さく家に問へバそれ
一とのなるにより今ハ此所に居らずと浅倉殿より厳に長田の残黨と亡し

なる縁故を告知らせしに十三ハ大に驚きさてハ浅倉殿は父の讐として長田
が一家類を悉して亡しものとおぼへしが扨て我も其族なり。是まゞくハ
爾までハあらじと思ひつるに今ハもや世の在でもまひも恐べしく。浅倉ふ
踵んてハ石を抱て淵に望みて薪を負て火を救ふ類ひよりも尚危ふし。爾へ
あれ阿古屋が音信なきぞ祈べ不慈にして人の兄たる道にあらじ我たと
ひ窄してもも彼家に下り妹や姪の身の果を尋んものと思ふにも。此地方に
暫時のうちも足を止め居んことは爾るべきにあらじ早く去んとせしが
でも年老にける又十奈を具せバ心のまゝにならうれて今夜ハかの此地方
に宿りを索て夜を明し明日ハ早旦に立出ん爾るにても人知らぬ旅宿や
ある尋ねしに此里より東国へ赴く駅路の外ミにおづゝなる白屋あり。
これハ貧しき旅人を宿し僅の價を取る旅宿なりけれバ廻国修行者の

類ひ。其外祖公傀儡師瞽女陶眞の輩のこゝろに宿を索けり。承来十三
此地方へ來る人のこゝろを見れバ。只知ざるものも多さすくに宿りを索りねより
しが。此家のミ新みして。他國より逃きたる此家に移り住ると呼て。遂に己ぬ
家に宿借りね。扨も貧しき旅宿すれバ。燈火とてもかゝげずして。僅に
焚さしたる火爐の邊に今夜宿りし旅人の寄集ひて。夛くの説話をなす
か十三へうちゐて居たりしが。多くハ源平合戦の甲と乙とのうわさを為り
しに其裡に一人の旅商人の傍に居る修行者にうち對ひて云けるハ
源平にあまた武士のうち。平家の士大將にて。悪七兵衛景清ハ古今に女
なる勇士なるが檀浦の戦に不思議に命助りて。古主の讐を報んとて
足下の如き修行者に身を窄して。頼朝公を狙ふよしの噂ありしく。淡
众より人形めて嚴に尋ぬることぞ。爾ばハ景清が在家を知り。訴へ出るもの

あらバ。賞格を下しおかるゝと也。我おのが如き貧しきものへ。彼を訴へし賞格
を稟まほしくハ思へども。其勇名ハ聞つたれども其人と知らざれバ。縦ひ足下が
景清なりとも。訴人の手がゝりハ思ひ断たりと呟くを。修行者ハうち咲て何くに
笑ひ。我よも回國修行者なるが。心なきにこそ答れども。貌ハ同じきこそあれバ
足下に我を景清と偽りて訴へなバ。多くの賞に預るべし。さらしくて今
とゝめく。我に酒を呑し給へ。とうち戯れバ。人々ハ足下よりハ良らべけれ
と。爾る偽りを訴へなバ。賞格のまへにまづ。奈何る罪に遇ふも知れ難きなる
方見のすゝむると云ければ。とよく笑ひけり。秋夜長しと云ながら。夛くの物語に時
移り。夜もいとゞ更闌て。遠寺の鐘の音のみぞ。九月廿日あまりの月なれバ。
亥半の月のあがりける家の隙より漏来る影のさやかなりと見えしハ実かの村
雨のさと降出るに。風さへ冷く吹起るに。寒さも肌にも増りしかバ。軒に

今夜明しがたしと宿かし旅人口順て。薪求て火爐の裡へ折焚ぬるにぞ
炎々と燃あがるにぞ其所ら迄白昼のごとく明りけり。最前より十三を。
回國修行者ありとはいへ。景清にあらずやと云ふ事を窺ひ見るに。正
しく景清なりければ。世に似たる身ある之に且似つる者もあるものなれど。
さりながら粗忽を云はゞと心に念じ居たりしが。今火光の明るさに彼修
行者をよく見けるが。疑ひもなき景清なり。彼とても這袖を見互に
見合せて悍然より五十余も此時火光ゆゑ景清をとくと熟しさに我ぬも
あらで降らしやと云つ傍に立寄ると十三は慌忙しくひきとゞめて云へりけるは。
これ坐なり妹刀自よ終に見もせぬ修行者に。熟々しき挙動は人の不審
をも憂しと制せられて心付き今さら人目を憚りて粗忽の程を慚愧
せり余も居りつる旅人に。彼三人の光景をとくと見るに不寐口にて最前よりも

して居る人どもはいぶかしく見付し人のごとく事々しき挙動へ狂気ならぬ者のふ
ると咎らるゝに十三は我等輩の身のうへを怪しめらるゝと眉を寄せて修行
者に對ひて語りけるは。此老女は某が姨にて候ふが。今
人々の宣ふ如く忽然として此程より縁者とやらんは此老女に娘のありしが先
頃ある人に嫁せしに一人の女子を設けて夫婦の間睦しかりしに。その夫去向
知らずなりしと泣しをのまより跡を慕ひ娘を伴ひ己もまた行来なく
なりたりて死生を知ずなりたれども老女は己を涙く嘆き。遂に
坐になりぬ某姨が光景を見るに悲しけれど奈何しても彼者どもの尋ねがたし。
遂させてやらんとて思ひつゝも何方をそれと定め難きまゝ東國に志ざしてさ
なほ旅の空伴ふうちも二人ながら云出しく狂ひける日ならぬさまに容貌ありと多く
に虚言真言をとりまぜ回國修行さるゝ身の諸国を廣く歩むなれど多方の

深雪
十三
五十奈
景清
内海の旅宿に景清十三再奇遇を

こゝ元見ゆるといへば爾るものとえへば向ふ見知るべきよしもあらぬべしと誘
甚だしく誘ひ出して目今足下を目前に遭えつれば忽ち前にわらふ
べきよしもなく。性体なく不逮しあり。とも素狂人ならねども
必ずんぬるけれて。老母が我を情ともおもはじ。若き女と幼き女子の。人を尋ねて
呻吟ひを見知らぬ子なるが。語りて數の人やと。何ぞ母子が立向ふてあり
しを我と又十奈にとつて。捜索と云へる債くと云ふ中ひきとば景徒は十千々も
指り妻と子の我を募べるの根ぞ。不便とおもへば双眼にさしくむ涙を発
不紛らしその噫憂ろうすん爾へあとも世には見さ女や。幼き女子は多くく
あるゝ常に途に違ひれども。怪しと我に思ひ知るべからぬく事をえらるん今
宣ふとは我語りへ。側に泣しきるなるとれば足下の嘆きよりぞその夫の傳く
聞くべ。親兄弟とあり捨く我を慕ふふる不便やと嘆しくも又嘆かゝん奈何

男子と知らば。妻子を捨てて他国せしは。よくよくの義にあらなく。仇ある
えて思ひとどまれば命生べき人あるまで。左もうの人は恩愛の羈に引され志気
を果さざるを。恩愛奈何さるとも妻や子と相見ることは有るまじきこと也。
足下に二人のための還會もしなからば。今某が云し言を以て諭して思へる
とて決断しあるべし。爾もなくば某は其ままに志氣を果すべきなれば妻は貞婦
の謚となり。女は孝子の名をもおとさぬとは某が口よりもしくは言ひ出べきことに
あらねども。尋ねなばなべての憐に思ひをくづつまではゞ我は思ひわざと乃てく。
云ひく迷ひを晴させても佛道修行さするの。本意なるは悪からぬぞ。離るき
のへとあんなるぞ十三始終熟と聞く景清がんと極めたる。忠義の義によりて感
激し。ことまぐおそしてもすきさ。修行者あれば好みもうすきに未来
心根。且は娘が子や孫の光景を見て。忠やかにも。先にし男の心根を察して

教へあらひしか。その言語は千金にも尚換がたき賜物なり。此后彼等に
還會ば今日の言を云出し。夫の宿志の妨を。なさざるやうに誘なんの。姨
御前も爾思ひ給ひ人目憚る旅宿。聲をたてざる言語を互にそれと暗させ。
まで又十奈は女心にて情なしと景清を怨ざるさまの見えつゝ十三
目めくばせに制さへ死ぞせうせぬなき。最前よりして隣居る旅人は
かうち笑ひある笑止の狂人かなと見しにても今なき修行者に。訓くしくも
めの云しき幸修行者へよく。それにて皆めざとなての贅言云く宿やしへ。
業と言の如く世の間の人に人鬼なきとせう。最前から林火して家ぬきべ
きあねうち。いざ一睡とうしてんと口の中に罵り西さるる卧きおれり。
まるる楽枕に寝るもあり。おのがまにまく睡りけり程く林火も消失て夜
さへいてく更るけり。旅人まへ熟睡の。鼾の声の寂として。物音断しおく

うちに。悪七兵衛景清は。世の事を思ひ出んとしく踏しめてぞ立出る。しも知らず
して十三は又十奈が伴ひとしもきる思ひく出る脊戸口に。撲地と行遭景
清十三は素来如法闇夜なく。また誰とも知らざれど。とめる驚きて双方へ立
別れつく星影にすかしてよく見ればまがふ貞佛と見しへまがふ景清も老女を具
したる漢子とぞ十三すかんと静々と密かに走りもそに十三ぞの声三十なく
は景清大人がのひあるさ給ど世の事は生しき思ひは同じ世の君がすへなれつくも
人を恐る猿病ものに似つれども何古至母子と見ゆるかなと云言語の殿たつき。
又十奈はよくと泣つゝも。景清に對ひてかつりけるは娘や孫が爲身を窶ひ伸吟
侍るが冬果は六波羅に擒とすり。そのよう遠きて来する。夢食ゑの名さると
聞きし奈何にするかんと云そぞろに嘆きしと十三とのに伴ひ安否をゆかん
そのうちに光をたさしけてもがくと世の事まぐ下り。不図れに身に還會。

嬉しとやらん甲斐もなく人目の関にさへられて明白には言語も。かたられざ
しを謎くと宣ふ事を借りてば忠義の為とは云ひながら係くも慕ふ妻や
子を。心強くもおそれしは忠難面もおそきぞと恨めば景清こそと君
怨言すれば道理ながら我木石にあらざれば妻子に逢て嘆さとえん。公
弱り君の御運辛ゆるものならずやと是彼思惟て最期のすさまじく云
しまり君の為には身を忘れ妻子を捨つるは武士の習俗なれば是非のなき
事と教弁へくれし。我を恨むは夫と論せば八十歳もうちもちとしき嗚呼
世の間に義理すくべからず身に於ては左に娘や孫が身に換くさく寡ふる
人を目前に見つく別すて泣しむる又後に娘や孫に逢ふき今の老衰の
語らば誠や嘆かんそ纔に老が泣しさ何に悔るんものあらん。おもひ出せば
前年重病に娩が身の存命ぐとも叶ふまじと娘が孝の真実と。景清

大人の憐みの高價の廿代と頌くる恩のいと重く。報ひがたくて鬼角
せるに尚も情をかけなひ。終に一子を産しまふ。守る恩の主人を離し遣が
うも怨みしへ。いと畏しとうち詫ぬ景清面をおもげく。怨みる且て
そがまくに別るとよくも詮ることるきに家云迹し道理と聴さるく爾
宣ふへ。嬉しくてそ侍るなとおんみを我を妻や子に云迹ん言語は涙の
喜役の限りすければ。とてふは云も無さけれ。且は今の世間に未がるする
きらふも云ひと十三大人も世代君がへ邦私語と人の見る身の欺に据く
に似たり。名残りは巻じなくべぞと去んとなるに十三止め足。盲目に隆
行来と見を窄くく徘徊をらへ。甲夜にも人の云ずくく世の人まるくと是
を知られ。其甲くみては悪うりなん扨と見下と観を変ずもすやし人に咎め
らるとも云逃るべきすもなてん。とぞ奈何わせとぞと云に景清摸ね

と拍とる宜ると諭へるに足下が教にまかしなば。たとへ咎ありとも其人
にあらざれば。欺くに易かりけんいざとらば速さし。此時景清十三と衣裳
を差替十三ハ忽ち回国修行者に身を変ぜしが。景清ハ薦僧に出扮く。
既に袂をわかんとせし當時出来る旅宿の主最前より物陰に忍びて光景を
窺ひしが此時声を荒らかにし汝ホら体たらく知らざるとや思ひし歟。甲夜
より合図しけるに案に差はず。豫て(?)より厳しく捜索の人景清
十三ありけるよ扨は去昔越前国三国の人も知りたる娼家戸
平次とて原ハ古き姿貌の世に持てるよしを娼家の娼婦にせしま
れらく衛門にて買ひしをそれなる十三とうらなものに近江の湖水の沖
にて欺きてく奪はれぬとそ怪からぬ始末くそ后落る損失多く巳
國の住居もなりがたく。此尾張にて由緒ありしが此本に移住ねんどさく

ある利市もあらずとて身をすてその生害せり。此時憚て十三が不爲なると
想へバいと悪く。かの主彼を尋出し今の怨を報んと。心に忘ざりし
しに不圖今宵此家に宿りし旅の薦僧ハ浮き仇ある十三よの。とて是
ぞ大の幸なり今ぞ怨を知らせんに覚悟をせよと抜身に十三目がけ斬
付ると早くも丹の下を潜りて戸平次を捩て膝に敷き汝に出るものハ汝
に降ると日頃強欲残忍なる心のなれバこそ我妹の容貌を好みて奪ひとり。
我のみしく利を得んと邪悪とすせバ白玉天の悪ませるのみ我をとかく。
忽ち妹を取戻せり報復の例なる今目前にみゆるなれ。公祀くく
と曰欲知尚貪欲の止ざらく家を敵とやふのなるとあやかる悪
私しく終にハかのもの産家彼ら。なんくの住居もなりがたく。他国に移り
居に至る。是偏により做にハあらで汝が作悪の報と知らざる愚ろ

白痴よ命とらんハ易けれど。しかし今ハ悪の非を改め善に赴く心あらバ。今儆ならん勧懲なりよく〳〵心に諾せよと強く頭を押付れバ戸平次ハさ苦しさに命死ぬべく思ひつれバ。たゞ免しねと云のミなり景清何とうち笑ひ爾ろ白痴ハ義に疏く我に懲ざるものなれバ。卿もくるべしと傍なる生木に卿付口に其枝を食しめ〳〵三人面を見合して完尓と笑ひ此家を足早にぞ立去りぬ。此時既に夜明なれバ戸平次が妻も起よけれど夫が居らねを不審ながらまづ門戸を開く処に思ひもかけぬ脊戸の木に夫高手小手に縛めら其口に枝を含て居れバ愕然として驚きしが扨てもあられぬありさまに急ぎ縛を切解き口の枝を取捨れバ戸平次再生の思ひをし歯切拳を握くりて嗚呼廷るりし家妻よ昨夜ハ宥りし暮傍と。六十六部の修行者と二人して我体にすゝつるもの無念なれ我も怨くハ

力量の覚へある身の云甲斐なく。御陣へ参るべきことをするを恥ぢ。何ぞ料らん修行者
は平家のうちに鬼神と人も恐れし景清なり。又其僧は十三とて。悪年
琵琶湖において何古屋を奪ひ去りける則ち何古屋が兄にして景清に劣らぬ
ものすなはち今暁我家を忍び出るものありしは盗人なりやと思ひつゝ見れば物陰に身
を潜めて始終の光景を窺ひ居るに景清十三二人のものがたり遺なく
聴きより厳しく詮議とするの盗人は訴出て信賞に預らんと思ふに且十三
は源氏の仇なり日頃の怨を此時に晴さんものと十三を呼止めし彼二人を
嘆くに勝る勇ある上に家は二人彼は二人寡は衆に敵せざるとさとりの其れも
知のごとく此家に郷めりしつるは豈道理にあらずやと妻をも欺きて己が恥
を覆ふ我慢を方見けるも此戸平次が妻は小雪といふ。夫に似げなく優しく
ありしが今戸平次が云ところ熟々と聞て呆りけるぞ。まことに疎ましきゆゑ

宜なり十三と云ふものは昔何古屋を奪ひしとて日頃怨みあれども。
その縁故を知らねものに宜なりとべき言語なり。況て世には兄弟なりと聞く
報ゆるものは兄として妹の危難に遭ふをそのまゝに知らざる顔する
ものやある。彼道理を欺いて妹を援ひ出せしは。それとても世には聞ゆるのこと
を思案しきものにもあらざれば。強ち悪むべきにもあらざるを且其当時に
何古屋を売し人買の金を不図おもひおこし。おのれも横しまなる心あらざりしや。爾
もと其時も横死なく十三を恨所なし。されば弁へなき彼奴さへ深き怨
ありとおもひを報むるよしなく十三を一日見るより前後を忘れ兼魚の挙動
忘れながら此女の恥をも兄の身なりき。まして神仏の見放しなかで身命に悪
るきことを得しことにて懲りて此后は悪しき心を持たぬ三国の住居
すりがかきも畢竟おんこが我慢より親しき人にも疎まれて此国をくり

に来りと諫めるに平次親ふくらうはおしえてむよしと只の立ちのが
竈のわきに煙の絶るも知らず悪事のみ我家の金誰子とあすくてん
とて買ひし女を奪ひしめのとなさしめ不道理をつけて悠ざる和の極
ぞ不審けれ爾妻と連添てさへあらねど我贅婿のことにへあれば
堪かねし免しおくぞかし。世后の事を憶ね時は斯しく移れども歳猶十
三遠くは行じ。聊追及て彼を捉へ此地の地段楯尾谷どの辺に許ぬる
わどあらば多くの信賞褒禄を爾せむ若年の換失を償ふ足もやと全る
おもひ日頃の怨をも晴さるべしと云つゝ走り出んとする後は声に慌忙引
留め。昨夜も二人に刃向ひし辛き目に逢たるひまでも未だ瘡も愈ざるに
猿ども再び彼に追かけ這回は奈何目にか逢すべし止りねと制されば
戸平次も焦燥て報放せんと岡も止ど小宮は夫の身上に過失あらん

ことの恐ありいへども敵しかねば。奴等の声を励して妻の夫に従ふこと
は渾ての世の習俗なるに海に阻り来敵すをば妨をなす白痴よ其処立
さらずば徒をなす。辛きめさしてもおもひしらさん。我志気は畢とし罵り
叫べば昨夜よりして此家に宿りし旅人は此物音に目を醒し。こは何る
と客子に此家に集ひ来てあるに戸平次小宮をおし擲ぎて去夫婦争
ありと。縁故を問わども引分て戸平次得じらと他方へ走り出づれば旅
人は。その事をはと一般に跡を慕ひて追行ぬ。小宮は今の争に脊をいたく
撃れければ暫時ら臥居たりしが夫の身の上気づかへしく。和を励まして
身を起し同く跡を慕ひ行けり。此戸平次といふものは越前三国の娼家
なり。素より家に贅婿するが生質貪欲深く邪曲の事のみ多かり。曩に
前編第八回に。近江の湖にて何古屋と。索し条にあるとく。其性行を措く

あゝ妻の小まんは是に似ず。心まめ直くして。萬に慈愛深かりければ
平日夫の貪欲を嘆き。屡く諫争へどもかなはず。猶も生害をすゝめつるが。兎
角に夫の心の悪事を見て貪欲の事のみなく。里人等の悪を重く。おもひ其
産を破り三國の住居なりがたく。尾張國野間の内海に。小まんが由縁のあり
けれバ彼処に手便りて此地に来り。かまへる生害に其日を送りて居たりけり。
斯て戸平次は景清十三が跡を慕ひ。十丁あまりも追行処に幽の殿より太
刀の声にて暫く止まれと呼びとめられ立止りて顧れバ此夜指して旅人の飛来るに
ありしかバ。これ我を止んとして追来つるにこそあるらめと思ふにつけて猛悪と
云程にまして一ツ微に思ひ出けるハ。彼者どもの此迄に追来るこそ幸なれ。是ぞ
景清にと追来しハ心にも有りて景清と知りぞ。定めてのまづあるらむ。熟つく
やつ八彼輩は万夫不當の勇ありて一人の力に敵しがたきハ今ぞ知る。

今旅人の我を欺しならバ二人の者を生捕んハ嚢中の物を
とるよりも尚易くこそあらんずらめと立止りて旅人を近く見下ろすに
来りしハ我を止んとするなりし。某これに走来しハ麁服搜索なれバ景清
十三の二人なり。彼等昨夜我家に宿を借りける修行者と薦僧なるが今聞
知れバ彼を捉へて信賞金を賜んとて跡を追ひ来しなり。彼方も二人我も
一人なれバ先逃をするにもあらんと思ふに是我思ひしハ足下に来るに方人
しくもあらんや。彼等を捉へ得るならバ幸甚にて信賞物を分ち与へやせん
が。此事肯ひ給へがしと言語巧みに偽りけれバ。原来貪ぼしき傀儡師祖公
なんどの類ひなれバまづくも悦しけれバ。信賞物を分んと云へるを聞くことよ
なく喜び。後先の工夫顧みず傅一般に云ひけるハ宜なりその実ならバ
我等どもへ忠義といひ且辛苦料とあらバいかで辞しませんや。

後に遂んとて戸平次と主税に。再び三四丁ばかりも走行ぬれ。只有
一座の林の下に。旅薦僧のたゞ一人木根に携とうちかけて休らひ居けるを
幽に望え。旅人ホと顧て。今朝景清と十三が。我家を忍び出るとく。密に
私語貌を変んと景清は薦僧になり。十三は修行者となり。互に貌をとりか
換へて忍び出るを怪まれつれど。彼方に休ふ薦僧は紛ふべうもなき景清なり。
各油断しのびそと飛が如くに馳近付旅薦僧を之囲え。戸平次主税に
そこ出伊景清今朝しもあれ我に会ち目見させる報ひ知と知れよ
と旅人ホに下知されば心得たりと大勢が一度にばらばらとかゝりければ薦僧
暫待と之を制しとゞ兼怨さえろど我は爾等のおもふものにはあらず
景清が為に回国する修行者の貌をなしに薦僧となりと呼ばりしふと
戸平次呵々と笑ひ。他人は欺くとも我をば争欺き得ん。修行者と

いへども貌の作り付たるものにあらねば。変んとやがて薦僧にも。商人にも
なるものを琴柱に膠と云ずなるかな。我はそれしらずに知ることあり。偽るも
未練なり。とても脱兎知なり。尋常に縛を受てよと嘲笑ひて又組付を
又拂ひ打合跡をすかさといへど。聴ことなければ詮なしとのひつて笠を
ぬいとりて我景清にあらざることを吟ねぬれども疑へば面体を見せ候。ここに
人にあらざること知りねべし。打云我は梶原どのに爾るものありと人も
知る馬場忠太なるぞかし。我主の命を稟景清が在向を尋んと打のごとく
貌を窶し国く尋ねどもさらに在向知れざれば。こゝの尾張は景
清が由緒の国と伝へ聞けば。もしや忍び居つらんと去年より密に此国に
来り尋るに今に至りて知れざれば。とて奈何せんと思ふ折から今ま汝を見
て景清なりと思ひしは眼と見ることあやまり爾云つるとおもへんなり。

其旨告知らせまゐらすれバ。辛苦勤をとくりかへしといふに戸平次呆れて。
暫時言語なかりしが。心裡に思ふやう。扨は夜景清を聞なりし一旦ど
聞けれバ手柄の為なれバ知らずとて今時の顔色と云ふに眼国に色変く。
遅ましく見ゆる漢子なれバ。這奴景清なるべけれど欺く打つハ云なるん悪託
彼が挙動をよく見まして云ひけるハ。小児を欺くごとくする脩ともぞ
笑止なり。今強気に出張る。梶原どのへ内々の人が。たゞ一人の景清を暴する
とく武士の勇僻に身を窄め。ききる虚の箕尾谷どの。内容にて知る
べけれバ。争ひをとく。元とまた。其人をといふよりも。召縛なりと殿
人に是非を云へさせ。折重りて高手小手に縛やして。箕尾谷が許に牽行させ。
道を急ぎ打やかるに時を移さず。既ち。戸平次ハ茶に至りて。景清を捉へ
参りつれバ。強く命船のふ信誓を下し給んと祈へ上れバ。箕尾谷ハ。

世に聞えし勇夫の景清。争かかゝる匹夫の手にかからんや。これ人違へにぞありつら
めと。猛に殴蹴て立出る。そ景清といふものを召出して見るに。梶原が
郎党なる。馬場忠太にありければ。且驚き且不審しみ。其縛を解て。広縁
に請じ居らしめ。足下は馬場忠太なるぞや。そも何者の為に斯体なる
に及びしと問ひけれバ。忠太ハ心裡に。戸平次が憎しく。御やまつるを。此時に
怨みを報ひ知らせんと。言巧みに云出けるは。不当のふる道理なり。某などのめのが
下郎の為に生捕られしハ。主命重きを思へばなり。其縁故ハ主君景季。強気
景清を捕へんと。多くの人数を遣し。所々を探求れども。其在家を知るよしなく
空しく月日を過るが。却て八果できるにあらぞと密に某を召して云く
景清が在所今に知れざれバ。他より捕へ出さバ。君命を辜くせしと強気
どの、おぼさんなれバ。と畏きに且へまつる云甲斐なきと世の人の笑んことも

忠太
戸平次

無念なりけれバ。何所より窺を窄し。其在所を捜索べしと主の命の厳がらく。若かりし時習つる尺八の用だちて。虚僧に打扮て。所々方々を尋ぬれども。ぞこともしらぬ便もなく。あまりに索ぬれしまゝに尾張國へ。景清が由緒の國と聞及べバ。所々の地に立まぐ尋するうちに今しも。此所彼所の林下に休らひ居つる。其處に侍る戸平次とやら。多勢を具して走来り。悉皆つんぐく景清なりと縛んとするを。事々に其実を述べく分疏すれど耳にも入れず。さらぬのくらく。無体に私を縛めたり。這奴ばらが如きハ物数ならぬ。切散しても脱さんハいと易かるべく思ひたれども。此國にちかく景清を捉へんといふものハ。箕尾谷公の内の人が。爾らバ命を稟しものと思ひかへしぞ。身を束縛の恥をハ受ゆ。景清がるなハ修行者に。身を窄したりと申しつれバ。爾るものに似よりしものを召捕しものならバ。人差ひとも云べけれど。

似てもつかざる虚僧を捕へよとは下知あるハ。疑ふとにハあらねども素。虚僧に打扮て景清を尋するよしと豫て聞及びぬるを人ハ。功を人に奪れじと素と知りつゝ捕へしぬらひ。隙とる間に景清を。其尾谷公の手に捕へ功名にせさしめんずる謀に非ざるやと。邪曲みし言語を発しと思へど。皆尾谷ハ当時隠れなき出頭なる権家に節等なれバ。怒をおさへて云へば。素不肖なりといへども。我職に撰まれて。民の邪曲を正し身の行く。さ爾ゆゑの僻せん。戸平次が如きハ素よりして。殊下民の事ならべきなどく大じるを命ぜらるべき。彼足下を景清と思ひ差ふハ。ゆゑあらん。目今我不肖にて尋問せんに我命ぜざるゝのよしを知りのそろしと云さして。戸平次を前に牽居させ大唱一声して云けるに。汝何等の故をもて其人にあらぬ人を景清なりと縛りしぞ。さぞ縁故ありぬべし。包まず旦に述べよ

と尋問されけれバ。戸平次ハ案ニ相違のありけれバ。顔色土のごとくなりけり。
戦き栗ておそろしく。昨夜此家ニ景清と十三と宿りける始よりしく
且ハまた互ニ貌をうち換て忍び出して至るまで詳らかに申上れバ其尾
谷馬場を聞て。あまりのことに呆れてありし我ら疏略くならぬ非ずさるハ何ろ
うらんと再び戸平次ニ對ひて云へりけるハ汝正しく十三と景清とが貌と
換て立退けりと見ながらに。其太者どのと景清なりと偽り越て上を欺き
信賞必罰を貪んと巧たる強欲至極の罪軽からざれバ免しがたし。
今日より獄ニ繋おいて後日罪を糺さるべしと厳かに令されバ下司の
輩共を兼て戸平次を引立て獄舎ニ押入て馬場忠太ハ最前より
の先景を見て居たりしが。戸平次獄に入るに至て。今朝よりの擬悶憤然
時に散て且戸平次が物語にて景清貌を変りて。今朝家体し方を

さして落行けると思ひしが。早く敵を襲ひ行て。景清を擒にしておのれが
功にせんものと。知程密に喜び。いと燥脾胃から笑ひ。其尾谷公の御白
する感激もあり。某にもゆへまいらせてく。主命寛せらるゝ
がさけまこと。やや帳を縮んと別を告るも匆々に慌忙しく出去けり。且
遠祖ハ最前より戸平次に方人しつる彼旅人ハ其尾谷が門前に伫
て。戸平次今や出来ると待てども音問なければ。とても奈何なりつる
やと獄の方を眺に。今朝景清なりと捕へし旅夢僧と下司の殺て
て送り出しつるが。呆れ惑ふて言語なく。暫付ても見送りしが。おまへに不審
晴ざれバ只今門に入んとする下司の袂を扣へ戸平次がことを問けれバ。下司
答て云。戸平次ハあらぬ人をもて景清なりと欺く其科によりて獄に
繋れ免さるべうもあらずといふ。と聞て驚き旅人ハ我々何の好身もあらされ。

戸平次に方人せられしが、今にもあれ其罪を糺されなば奈何ならん罪科に落さるも知るべからずと、信実邪の欲しといふも栄利をせんがためなるに、かく獄中に繋るゝは何の楽しとかするやある。あな恐怖や恐怖とおのゝきまどひ、足早に此地方をぞ脱出去けり。且説戸平次が妻小雪は夫の跡を追行しに、来て親しく見ざりしかば、さては道の差へるやと躊躇処に、道往人の世に強欲のものはあれど、戸平次と申すごときは少なり。かゝる信実の貪き事も、あらぬ人を景清なりと召捕て、心強くも箕尾谷どのに訴しが、捕へられたるといふものは、当時強盗の出張する梶原どの陣内にて馬場忠太といふ人なりとぞ。上を誣の罪蹟あらばと、戸平次は獄に繋れたり。夫うちは命召さるべし。欲の世とは云ながら、あまり非道の欲ときけば、戸平次が私も定目にあるは恐怖やおそろしと、うち語らひ往るを、小雪首尾

と叫泣しが、嗚呼浅猿しや、爾るゝのあらんずると思ひしなるに、跡を慕ひ来りしに、案に差ずかくのごとき憂を叫泣しさよ。縦え悪人なりとても夫には夫の、戸平次どの危難に逢ふと叫らんは叶ねまでも、妾どもて夫の罪に換へずやと獨ごちして、そゞろに箕尾谷が館に走り行、下司にうちくわけをのべ、夫の罪に代らんと口説つ嘆ければ、その下司の者も憐ありしが、殿よし箕尾谷に告たるにぞ、戸平次が妻に似げなきものと、其心ざしを感ぜしが、あまり爾ばかりも極しなるべく、今馬場忠太を転て夫の罪を償はさせべし。然らざれば強盗へ与へんとの踪落けれど、兎をとえかくし被る我は云がどうして、唯なにより出すよしみて、熟く教へられつゝ、きつと報しる下司に云含め、其心を得て箕尾谷の教への如く、小雪に知らせにとて、暫しと感謝しつゝ馬場忠太が形貌をいと細やかにぞゆるしそ。

其旧跡を慕ひ祈し祠とぞ傳へけり。

景清外傳松の操後編巻之三終